

シベリア抑留記

広島県 九十歩 利 春

私は満州第二六四一部隊第十八野戦自動車廠にいました。八月八日午前九時、部隊裏山の東山監視所の勤務。翌九日朝九時少し前、ハイラル上空に戦闘機に護衛された爆撃機飛来、友軍機かと思つた途端、市街地に爆撃、ソ連だ！と思つたときは既に遅く、次々と爆撃を受ける様子を山の上から眺めるばかり。交代が来ないので十時過ぎ隊に帰りますと、隊内はハチの巢を突つついたような状況でした。さらに部隊正面にはソ連戦車がドカッと居座っていました。隊内での話では、部隊長は師団司令部に行つたまま帰隊していません。隊内は後退準備を命じられ、一装の軍服に着がえて、トラック十二台に食糧、燃料ドラム缶などを積み込み、午後八時過ぎ無灯火で裏門から後退、夜陰を利用して走り続けたが、夜が明けても走る車に、多数の邦人女

性が泣きながら車に乗せてくれとすがりついてきました。歩兵部隊も後退しており、夜を徹して歩いた模様で疲労こんぱいの惨めな姿、またラクダ部隊も同じようにに弱り果てており、特に民間人の婦人など必死の状態で自動車にすがりつこうとするなど、悲惨なものでした。

それらの泣き叫ぶ声を振り切つて車を走らせました。途中飛行場の横を走りましたが、友軍の飛行機は一機も見えません。上官の話では、日本機は全部南方に行つてゐるとのこと。ヤケシ駅付近まで後退したとき、乗用車が対向方面より近づき、車上に部隊長の顔。部隊長はメントハまで後退して部隊がまだ未到着なので引き返してこられたとのこと。これから部隊長の指揮となり、その付近で昼食準備を始めました。と、後方歩哨より「敵戦車」の叫び、直ちに対応するため半煮えの飯ごうを持つて自動車に飛び乗り発進、また走つてメントハ駅付近で野宿しました。

翌朝九時ごろ出発、後退を続けていたところをソ連機に発見され銃撃を受け、通過するのを何とか車の下

に潜ってかわし、さらに出発して博克図を過ぎ、扎蘭屯に着き大休止となりました。ハイラル出発当時十二台の車が、このとき七台しか到着していません。途中で故障や湿地帯にぬめり込んだり、銃撃にやられたり、兵隊も途中で離散し、生死不明者も数多く、部隊長も掌握に困っておられました。

それからがまた大変でした。夕方班長より「博克図の部隊に弾薬を輸送せよ」の命令を受け、弾薬の積み込みをしていると、班長に引率された十六歳の志願兵四名が同乗するという。そして、兵から「私たちは対戦車肉攻班だ」とのこと。肉攻班とは、竹一・八メートルの先端に三十センチの板を取りつけ、その上に地雷を載せて道路の傍らに伏して敵戦車のキャタピラにその地雷をはめ込み、キャタピラを破壊、戦車の進行を不能にすることのこと。彼ら志願兵は、日本国内で神風特攻隊と同じように特訓を受けた兵士でした。

夜になって十時ころ博克図を目指して出発、途中興安嶺の頂上に差しかけたところ、日本軍の歩哨にとめられ、これより先は通行不能とのこと、さらに頂上

より少し前方まで案内してくれ、前方を見ると、この頂上に向かう一本道には赤と青の灯をつけた戦車がこの頂上へ向けて進行中、もちろん赤、青の灯は敵戦車でした。私たちは四名の肉攻班を頂上に残して、車の向きを変え、今来た道を一目散に帰隊しました。でも、その翌々日、私たちの部隊は数十台の戦車に包囲され、武装解除されましたから、恐らく肉攻班も命令どおりの攻撃をしなかったのでは……。

その後、博克図に向けて行軍させられる途中、日本兵の死体が道路の端に幾体となくパンツ一枚で転がっていました。が、ソ兵の監視のもとなのでどうすることもできませんでした。

十月十日ころと思いますが、全員集合させられ、ソ連将校の話として「日本人は十一月三日日本の国勢調査に、シベリア経由で全員帰国さす」とのこと。我々は皆喜んで示される貨車に乗り込みました。

貨車の中は二段になり、小便是すき間から、大便是隅の方で用を足し、貨車の進行中板切れで外に投げ捨てました。ソ兵が自動小銃を持って五、六名で監視し、

出發駅よりメントガ、ヤーケーシ、ハイラル、満州里
駅を過ぎ、チタ駅より西へ西へ進行し始め、初めて帰
国できない、だまされたと気づき、皆総立ちになりま
した。

チタ駅から四、五時間乗ったところ突然列車がとまり、
駅のないところに下車させられ、少時休憩後、約三十
キロくらい歩かされて、着いたところはグリーンレク村グ
リカ第五十二収容所第三分所で、約五百名、夜明けに
着いて野宿をし、収容所建設のため付近から材木を切
り出しバラツクを建て、その外側に有刺鉄線をめぐら
し、バラツクの丸太を積み重ねたすき間にはコケを積
んですき間をふさぎ、ここでの生活が始まりました。

最初一カ月は何とか過ぎ、十二月初めごろから伐採
作業になりました。朝五時起床、朝食は皮かむりコウ
リヤンを炊いた飯が飯ごうのふたに八分程度。

そのころより体力が衰え、睡眠は満足にできず、九
月ごろから入浴は一度もなく、被服の洗濯もなくシラ
ミがいつばい、味わったこともない寒さが襲い、スト
ーブの傍らで暖をとって床に入ろうと思うと、すし詰

めのため他人に場所を奪われ、それこそ生き地獄とい
うのはこんなのではないかとだれもが思っていました。
一月に入って死者が激増し、多い日は数十名の死亡
で、この次は自分ではと何度思ったかされません。埋
葬地は石のごとく氷結して（ツンドラ）、死者を埋める
穴がなかなかできません。枯れ松の丸太五、十年のも
のを四、五本、俵を積みむように組み上げ火をつけて帰
り、翌朝行き焼け木を除いて焼け跡を掘りますが、十
五センチから二十センチくらいしか掘れません。その
ため収容所の死体置き場は山積みになりました。ソ連
では死者に衣服は不要と脱がせ、十日間ぐらいかけて、
深さ一メートル五十センチの溝状の穴を掘り死体を三
段に重ねて埋葬しました。

埋葬地への死体の運搬は軽作業の病人でやらされ、
むしろの上に乗せ両端を縛り運ぶのですが、むしろか
らはみ出して進めなくなると、あごにロープをかけ雪
上を一体四人で引っ張つてという、まことに申しわけ
ない悲惨なやり方でした。遺体を収容所の外に運んで
いたとき、四角の望楼の上のソ連兵が何か叫んで嘲笑

したのに出会ったことがあります。腹が煮えくり返り、「おのれ、今に見ておれ、必ず仇を討つてやるぞ」とにらみ返して通った思い出があります。

三月末ころ、春には帰国とのうわさが流れ、そのために遺骨の作成の指示が出て、死体置き場から一体ずつ出し、手足十本を手おので切断、鉄板の上で焼き、一人の遺骨で二十人分をつくらせました。三月末、生存者二百三十三名、死亡者二百六十七名だったと覚えています。この死亡者については、昭和二十年五月ごろ徴集された徴兵検査で、第三乙種の者（ハイラル第八野戦自動車廠関係者三十歳以上の者）と、配属してきた当時、竹の水筒、竹の飯ごう、竹の帯剣で入隊した体の弱い兵隊が特別多く含まれていたように思いません。

帰還のことについては、昭和二十三年六月、全員帰国の命令。墓地に参拜もできない心残りのまま列車に乗り込み、帰国？の途に。でも船に乗るまではと安心できませんでした。ナホトカ港に着いたら帰国中止命令が出て、また列車に寄せられアルチョムグレス駅で

下車、収容所入り。作業は変電所貯水池の建設。ここで初めて米の御飯にもありつく。ここでは民主化運動が激しく、特に若くて労働力もあるとして皆から推薦され、民主化運動の役員にもなりました。

翌二十四年八月また帰国命令が出て、八月六日アルチョムグレス駅より乗車、同日ナホトカ港に。今度は本物のようで、九日朝、日の丸の旗のついた第一大拓丸に乗船でき、十一日舞鶴港に入港しました。日本山河の緑の山々を眺め回し、初めて日本に帰り着いたぞという実感を味わいました。しかし船から上陸許可がおりず、あたりの話によると、第一回昭和二十三年引揚者による争議に次ぐ第二番目の民主化騒動の集団だからとのこと。夜通しMPのモーターボートが船の周りを巡回していました。翌日上陸許可がおりて、日本の大地に足をつきました。検疫終了後三百円を支給され、今までの空腹が一度に出てきたようで、売店で辛けんび一袋に二百円を出しました。

昭和六十二年まで事業主として働き、現在は年金生活ですが、最近ロシアの「シベリアゴレク」「グリ

カ」の夢を見ますので、七月二十三日舞鶴引揚記念館の参観にも行き、できれば埋葬地への墓参りにも参加したいと念願しています。

シベリア抑留記

福島県 熊田重行

出生から入隊

大正十四年三月四日、福島県田村郡守山町大字大供本地五十五番地、熊田家に生まれ、守山尋常高等小学校高等科を昭和十四年三月卒業し、家事農業の手伝いを二年ほど行い、昭和十六年一月から日本国有鉄道郡山工場に就職していたが、繰り上げ徴兵により昭和二十年二月東京世田谷七二部隊に入隊、直ちに渡満し、間島延吉満州二六三二部隊（塚本善太郎大佐）に入隊、輜重兵として、ソ連軍に対する特攻、対戦車攻撃の初年兵教育、訓練並びに中国人を使用し南方に弾薬の輸送などの任務につく。

ソ連軍の侵攻（八月十日）

大渡川宿舎から延吉に撤退。弾薬分散作業に従事、八月十四日大雨で作業中止。それぞれ遺言を書かされる。

終戦

正午に集合、停戦の報せを聞く。終戦により五万人くらいの兵隊が延吉に集結し、ソ連兵の指揮下に入り、八月末までコウリヤン、アカザ、アワなどを食べ、赤痢など患者がたくさん出て、食糧、衛生状態が極端に悪くなった。

シベリア抑留地への旅

延吉からソ連兵監視の下、八日間野宿しながらソ連領クラスキノに入り、十月十四日まで幕舎生活をする。十月中旬、貨車にてホールに行き、コルホーズに着く。

抑留地の生活

十月中旬から十一月中旬まで、雪の中、芋掘り作業で、凍土から掘り出すのは大変であった。その後、豆ひき作業など集会所に宿泊しての作業は、飢えと寒さで体の衰弱が激しく、シラミの発生で悩まされた。十一月末から道路工事作業に従事、十二月下旬ピキンに